

THE AMERICAS TODAY



天理大学アメリカス学会ニューズレター

NO. 56

2007年5月

Special to the Newsletter

アジア系アメリカ人作家

國重 純二

アメリカ合衆国におけるマイノリティ文学は、黒人文学を抜きにしては語れない。リチャード・ライトやジェームズ・ボールドウィンが、白人による黒人迫害の実態を黒人の側から描き、黒人文学という新しい分野を確立した。しかし、かなりな時間が経過してから発表されたアリス・ウォーカーの『カラーパープル』は、白人による黒人虐待よりむしろ黒人内部の男女の差別を主に取り上げ、女性の自立とか愛のあり方への言及が大半を占め、黒人文学から「黒人」を取り去り、普遍的な「アメリカ文学」への地平を切り開いた。

ユダヤ文学はどうか。ユダヤ性を執拗に追求したバーナード・マラマッドだが、『アシスタント』ではユダヤ性の継承を異教徒のフランクに求めた。ソール・ベローも『この日をつかめ』で、主人公に「普遍的な愛」を求めさせる。ユダヤ文学という枠から抜け出そうと苦闘する作家の息づかいが感じられる。

アメリカ合衆国における移民文学は、主人公が母国と合衆国文化との衝突によってアイデンティティの危機に見舞われるが、最後にはアイデンティティを確立するというパターンが多い。中国系エイミー・タンの『ジョイ・ラック・クラブ』も、そういう観点から読むことができる。中国から逃れてきた一世の母親と、アメリカ生まれの二世の娘たちの世代間相克の中に、文化の衝突や二世たちのアイデンティティ探しが浮き彫りになっているからだ。

インド系のパーラティ・ムーカジの『ジャスミン』は父や兄弟に支配されるインドからフロリダに不法移民し、名前を替えながら移動を続け、カルチャーショックを受けつつ、内面の変貌を繰り返し、最後には白人の子供を宿すものの、サバルタン（従属者）の立場から自立した人間の尊厳を獲得していく物語である。ある評者が言うように「亡命状態、喪失感、方向感覚の喪失がこの作品を異国におけるアイデンティティ追求」の物語にしている。「本国」と「異国」での生活が入り交じって描かれるので、アイデンティティの問題が余計に目立ち、典型的な移民文学になっている。ジョン・ホップは、「ジャスミンのポストコロニアルで、エスニックなキャラクターはポストアメリカン」とであると指摘する。

中国系のハ・ジンの短編を読むと、舞台が中国であることに、従来の移民文学との違いが感じられる。「幼稚園」も懐かしい風景としての中国であり、異文化との衝突などどこにもない。「サボタージュ」にいたっては、共産主義への批判が顕著である。母国批判と言ってもいい。作者は自分の原風景を確認しようとしているのだろうか。捨てがたい故郷と捨てざるをえない故郷のせめぎ合いをそこに見るのは容易である。おそらく母国と自分との関係を確認しようとしているのであろう。異国でのアイデンティティ追求の前提として。

日系のメアリ・ユカリ・ウオーターズの短編作品はどうか。「戦争の余波」にしる「配給」にしる、日本への懐かしさに溢れている。戦中、戦後の日本を愛おしげに描く筆致は、むしろ古くささを感じさせる。だが『アメリカ短編小説傑作選』に何度も選ばれているところを見ると、アメリカにおける評価は高そうだ。セピア色の作品群は、日本に住む日本人には古くさくても、異国に住む作者には日本の現実なのであろう。彼女も自分の出自とその確認を目指していると言えそうだ。総じてアジア系アメリカ人作家には、異文化との衝突から生じるアイデンティティの危機がひとつのテーマになっているように思われる。

韓国系のスキ・キムの『通訳』(2003)を少し詳しく検証してみよう。主人公スージー・パークは、自分をコリア系アメリカ人の一・五世と考えている。彼らはコリアで生まれ、幼い頃アメリカに移住したため、父親たち一世とは違って、英語を自在に操ることが出来る。それでいながらコリアというしがらみから脱しきれず、韓国・朝鮮語も流暢に喋り、コリアの文化的な伝統や道徳律に縛られている。彼らは、自分を完全なアメリカ人と思っているアメリカ生まれの二世たちとも、完全なコリアンであることにこだわる一世とも違い、どこにも帰属先を持たない不安定な存在であり、この不安定性が作品の縦糸になっている。

重要なのは三重になったプロットである。まずスージーの恋。三十歳年上の妻ある大学教授で白人のダーミアンとの駆け落ちと典型的なアメリカ白人である妻子もちのマイケルとの不倫。次に両親を射殺した犯人探し。そして姉妹の葛藤。作品は、ブロードウェイや五番街に象徴される華やかな大都会としてのニューヨーク、ウォールストリートに代表される世界経済の中心としてのニューヨークではなく、いわばそうした明の裏に隠れ潜んでいるニューヨークの暗の部分で移民の目で描こうとした物語と言える。それは白人、黒人、ネイティブ・アメリカン、アジア系移民、ヒスパニック系移民たちによって作りあげられたピラミッド構造が、司法制度を利用した白人重視の政治の落とす影であることを明らかにしている。

5年前に両親を射殺した犯人を、法廷通訳という仕事で得た情報と、捜査にあたる刑事から得た情報をもとに追いつめるミステリーの体裁をとっているが、ことはそんなに単純ではない。まず、通訳という仕事はたんに言葉の交換ではなく、「正確で、しかも創造的な知性を必要とするのだから、これは芸術である」。一・五世たちはこの通訳の立場にいる。つまり韓国とアメリカとの(文化の)通訳なのだ。姉のグレースは、子供の頃から両親とアメリカの官憲との通訳を務めていた。それは、国籍を取得しアメリカで成功するために、

両親が不法入国している同国人を司法当局に売る通訳であった。ここから異国で差別され苦闘する移民という範疇を離れて作品は一気に移民内部の対立に向かっていく。『カラーパープル』と同じ方向性である。違いは、そこに国籍が絡んでくるという点だ。不法移民にとって国籍の取得は成功と表裏一体である。いや死活問題なのだ。そこにアメリカの司法当局が絡んでくるとどうなるか。コリア共同体内部に内通者を作り、不法移民を排除するとは、じつは白人中心の価値観をアメリカ全体に浸透させ、異文化を差別化しようとする事なのである。アメリカを表現する際、かつては人種の坩堝という言葉が使われたが、いつの頃からか人種のサラダボールと言われるようになり、様々な人種が独自の文化を誇って混在していることが強調されるようになった。しかし、坩堝と言っても、アメリカ人という新しい人種が誕生したわけでないように、サラダボールと言っても人種間の差別がなくなったわけではない。公民権運動は成功したかに見えても、白人優位の事態は密かに維持されているのだ。このことを『通訳』は密やかに批判している。

一世と二世の対立は数多く作品化されている。しかしこの作品で浮上してきた一・五世という存在は、前述したように、コリア文化とアメリカ文化の狭間で揺れ動いている。たとえばスージーの姉グレースは、少女の頃アメリカの男とつき合っただけで命じる父親に反抗して、白人の男たちと遊び歩く。キリスト教にのめり込むことで、儒教と縁を切ろうとする。しかし韓国人の恋人が、彼女を苦しめる両親（グレースは同胞を裏切る両親に加担せざるをえないことに苦しみ続けた）を、愛する彼女のために射殺したことを知ると、コリア的伝統に則って両親の敵を討つ。グレースは最後にはアメリカ文化に背を向ける。一方のスージーは、許されない恋愛を通じてアメリカ文化から逃れられない。スージーとグレースは同じ通訳であり、双子と見まがうほど似ていながら、引き裂かれているのだ。一・五世の、帰属先不明の不安定さと、どちらの側に与することもできなくなった通訳の悲劇が、この作品の縦糸と横糸になり、複雑な模様を織りなしている。

縦糸と横糸が織りなすもの、それがスージーの不倫である。彼女は不倫に対して罪悪感を持たない。コリアは勿論、アメリカでも許されない不倫に罪悪感を持たない主人公を創造することで、作者は何を言いたかったのか。ジョン・バースは、物語は、男性である作者が一方的に、女性である読者を犯して子供（作品）を生まず関係から、愛し合っただけで子供を生み出す関係に変わらなければならないと言ったが、スキ・キムはもっと進んで（文化の）不倫こそが作品を生むと言いたいのではないだろうか。それを取り持つのがふたつの文化に関わる「通訳」なのではないか。

スキ・キムには、他のアジア系アメリカ人作家に顕著なアイデンティティ追求の姿勢は見られない。ここに、アリス・ウォーカーが『カラーパープル』で黒人文学の枠を打ち破ったように、従来のマイノリティ文学の枠を超えて、文学的営為の本質に迫ろうとする意気込みを読み取るのは無謀すぎるだろうか。

（鶴見大学教授・日本アメリカ文学会元会長）

文学の中のアメリカ生活誌(47)

新井 正一郎

Hash House(安食堂)アメリカに優雅なレストランができたのは、独立戦争時に結んだフランスとの同盟の一つの産物であった。だが、独立戦争が終わって50年ほどすると、多忙なビジネスマンや旅行者向けに、手軽で安い料金のlunch(昼食、1820年代の言葉)を提供する新しい種類の食堂が生まれた。ホテルや立派なレストランでの食事の平均価格が25セントであったのに対し、1回1セントで薄切れの肉一切れ、パン、焼き豆、トモロコシガユをとることができたこうした狭苦しい安食堂は、南北戦争後になると急速に広がり、1860年代にはhash houseとかhasheryの呼び名で呼ばれ、1880年代に入ると、lunch jointとして知られるようになった。この種の食堂で働く皿洗いや炊事手伝いに、早くも1840年にはpot wrestlerという名前がついた。また、給仕を顧客はhash slinger(1862年)とかsling hash(1872年)と呼んだ。騒々しい安食堂で働く給仕がコックに注文を大声で伝える簡略な言葉には、耳なれないものが多い。「筏にのったアダムとイブ」(Adam and Eve on a raft)というトーストにのせた2つの落とし卵のことであり、「車軸につける潤滑油」(axle grease)といえば、バターであり、「ブロンド」(blonde)はクリーム入りコーヒーのこと、「鉢のなかの雄牛」(Bossy in a bowl)は、ビーフシチュー、「鍋のなかの屠殺」(slaughter in the pan)といえば、ビーフステーキのことであった。このような部外者にはわからない言葉はhash house Greek(安食堂のギリシャ語、1930年代の言葉)と呼ばれたが、1950年代に入ると廃れていった。理由は食堂と調理場を分け、コックを客から見えないところにおくように設計された安食堂が増えていったからだ。もちろんこうした隠語のなかには一般化したものがある。ベーコンとレタスとトマトのサンドイッチの頭文字を連ねたBLT、片面だけを焼いた目玉焼きのsunny-side up、一杯のオレンジ・ジュースのO.J.はその一例である。

1880年代以降になると、さまざまな形態の安食堂が誕生する。例えば、1893年にシカゴで開店したcafeteria(カフェテリア)は、この年に開かれたシカゴ・コロムビア博覧会にきている大勢の腹を空かせた客に料理を迅速に提供できるように、客自身がさまざまな料理から好みものを選び盆にのせ、自分で料金を申告する形態の食堂だが、客のなかにはこの店をユーモラスにconscience joint(良心の店)と呼ぶものもいた。1880年代になると、cafeteriaとlunch-stand(ランチ・スタンド)とを組み合わせで作ったlunch wagon(ランチ・ワゴン)という安食堂が登場する。ほとんどが警官、タクシーの運転手など夜遅くまで働く人々を相手に営業していたので、1880年代の後半までnight owl(夜のふくろう)と呼ばれるようになった。これは夜遅くまで起きている人を、1846年の俗語でnight owlと称したことからきている。当初は鍛冶屋や荷車製造者がランチ・ワゴンを作ったが、その商売が繁盛しだすと、さまざまな人が改造品を売り出した。1891年、マサチューセッツ州のCharles Palmerは、「夜のふくろうランチ」と命名した特別なデザインをほどこしたランチ・ワゴンに対して特許による保護を求めた。1897年、ニューヨーク、ボストン、フィラデルフィアが鉄道馬車を売り払い、路面電車を敷設するようになると、地元のランチ・ワゴンの持ち主は古い鉄道馬車を15ドルから20ドルで購入し、それらをlunch car(ランチ・カー)に改造した。もっともニューヨーク、バッファロー、ニュージャージーのように、見苦しく、目障りだという理由でランチ・カーの営業を禁じる法律を作った都市もあった。Patrick Tiernyなる人物は立派な食堂専用車になって、家族や女性が座れる仕切り部屋を備えた新しいランチ・カーを作れば、禁

止条例に抵触しないとことに気づいた。1900年代には、この安食堂はdiner(ダイナー)という呼び名で普及するようになった。

Upper Crust (最上流階級) Benjamin Franklin は *Information to Those Who Would Remove to America* の中で「家柄のよさ以外にとりえのない人」が新大陸に来ることは賢明でない旨書いている。それでも17世紀の小さくまとまった集落には、the gentry とか the quality(共に上流社会の人々を意味する16世紀のイギリスに初めて現われた言葉)と呼ばれた一握りの地位(特権)と富を所有する人々はいた。一例をあげよう。1686年に、バージニアの大規模農園の農場主 William Fitzhugh の日記によると、膨大な評価額の川沿いの2万3,500エーカーの未開地に加えて、とうもろこしやパンの原料となる小麦を生産していた数千エーカーの農園、ニセアカシアの柵で囲まれた広大なりんご園、その使用料だけで一家が快適な生活を営むことができた製粉所、それに雇われていた黒人達が暮らす奴隷小屋などを所有する彼は、大きな地下室があり、煉瓦作りの煙突を持つ、美しい家具や装飾品で満たされた13の部屋数を誇る2階建ての大邸宅に住んでいた。

1787年に登場する wellborn(家柄のよい)は、John Adams が論説で用いた「金持ち、家柄のよい人」に起源をもつ言葉である。もう少し言うと、当時の合衆国は、憲法批准をめぐる、全国で激しい論争がかわされ、連邦党(賛成派)と反連邦党(反対派)という政治団体が生まれた。フランス革命を知っており、共和主義の下では「何もかも破壊されてしまう」ことを危惧した賛成派の論客の一人 Adams は、「富や家柄を含む貴族が立法府内に自らの部門を持ち、人民部門の欲望や派閥主義を抑制すべきである」と記し、支持母体の有産階級層に呼びかけたのだ。後、wellborn は連邦党への蔑称として用いられた。

初期のアメリカには、家柄とか社会階層を誇りに思う人はほとんどいなかった。ところが1770年にフィラデルフィアの印刷屋がアメリカ初の家系という本を刊行すると、事態は一変した。1818年までに、「名門」という意味の英語 First Family を短縮化した F.F. という表現が、またたく間にアメリカ中に広がった。当時のそうした名門の多くは、真の富と地位(特権)を持つだけでなく、最初に入植してきた人々を祖先に持つ家柄であった。かくして1847年には、F.F.V. と言えば First Families of Virginia のこと、つまり「バージニア州の最初の一家」の意味であり、F.F.T. と言えば、「テネシー州の最初の一家」を指す表現となった。もっとも南北戦争の期間になると、北軍の兵士は F.F. という言葉を fast-footed「速足の」という意味で使った。彼等は攻撃を恐れて逃げて行く「バージニア州の速足の兵」を、F.F.V. つまり Fast-Footed Virginians と呼んだ。

独立独行人を意味する民主的な用語 self-made man がアメリカに登場するのは1832年のことである。この時期には上流階級や新興成金に対する蔑称も沢山できた。ニューヨークの上流階級は、1835年頃になるとパンの上皮を意味する upper crust と、又新興成金は乳皮のイメージから cream of society と呼ばれた。1840年代になると、上流階級や富豪階級を数字で表現する言葉が生まれた。1844年から使われた Upper Ten Thousand(上層の一万入)その短縮形 Upper Ten(1848年)という表現がそれである。当時の『ヘラルド』紙は Upper Ten に codfish aristocracy(成金階級)という新しい呼び名をつけた。1888年に、弁護士 S. W. McAllister が the Mrs. Astor と呼ばれた大富豪 Astor の義理の娘の舞踏会に集まる富豪の数にヒントを得て、The Four Hundred と(上層の400人)という言葉を作った。この言葉が当時流行したことから、作家 O'Henry は短編 *The Four Hundred* (1906)を書いた。

(天理大学国際文化学部教授)

Essay

マーク・トウェインの「アメリカン・ドリーム」
森下 和彦

1835年にミズーリ州の小村、フロリダに生まれたマーク・トウェイン(以下トウェイン)は、若い頃からジョン・ロック、トマス・ペイン等の啓蒙思想に影響を受けていたことが知られています。南北戦争を経た後、彼はアメリカにおいてジェファソンのアルカディアが保たれ得るという信念、言い換えればジェファソンの共和国の理念を全身に満たしていたように思われます。それは作品においても明らかで、『^{あかけつと}赤毛布外遊記』(*The Innocents Abroad*, 1869)から『王子と乞食』(*The Prince and the Pauper*, 1882)に至る頃まで、彼はかなり希望的、少なくとも肯定的なアメリカ史観を作品中に表明しています。その彼も1880年代を中心とする作品群においては、田園の理想と都市の発展という、新しいアメリカが抱えるアンビヴァレンスに捕らえられ、ジレンマに陥っていることをあらわにします。つまり、かつては時間の支配を受けないタイムレスな空間として「永遠に無垢」と信じられたアメリカにも確実に歴史が存在し、旧大陸がかつてたどった「墮落」への歩みをはじめてしまった、と感じ始めたことによるジレンマに捕らわれたことが認められるわけです。当時がフロンティアの消滅期であり、アメリカ全体が拝金主義に走った、いわゆる「金メッキ時代」のただ中でもあり、また世紀転換期を迎えようとしている時代であるという歴史的背景を考え合わせたとき、その「パラダイムの転換期」に先行する形で彼が自らの「アメリカ史観」の転換を作品中に表明したとすれば、それは文学者としての彼の想像力の先見性を示す一つの資料として、大変に興味深いことです。

筆者にとってなお興味深いことは、プロットなどに表れた彼の「アメリカ史観」の変貌が、およそ100年後の歴史家サクヴァン・パーコヴィッチの行った研究を援用することにより、より鮮明に浮かび上がる、ということです。パーコヴィッチは、長年のピューリタン研究の成果として著書『アメリカのエレミアの嘆き』(*The American Jeremiad*, 1978)において、ピューリタンは、自分たちの存在意義を、旧約聖書の「エレミア書」に見られる「嘆き」に重ね合わせて考えたと分析しました。そのうえで彼は、未来に関して楽観的な希望を持つことに成功

したピューリタンの「集団の無意識」が、一つの持続的レトリックとなり、後のアメリカの各世代が自らの「アメリカ史観」を説明する際に無意識のうちに利用され続けてきた、という仮説を提出しました。筆者には、小説家トウェインを作家であると同時に歴史家、社会批評家として捉えるとき、パーコヴィッチが「アメリカのエレミアの嘆き」と呼ぶこのレトリックに関して、ほぼ同様の意識を抱いていたのではなからうかと推測されます。いいかえれば、筆者は、トウェインをも含めてアメリカの未来を案じる知識人の多くが「アメリカのエレミアの嘆き」を「アメリカの夢」を修辭的に説明しうるレトリックとして無意識のうちに自己のものとしていたのではないかと考えるというわけです。

過去の記憶と現在の事実から未来を推しはかる三角測量が「アメリカの夢」のエレミア的レトリックですが、パーコヴィッチはそれを三つの局面に分け、それぞれを「約束(promise) 墮落(declension) 「預言」(prophecy)と呼んでいます。楽観的「アメリカ史観」に基づいて構築された作品では「約束」と「預言」の局面が強調され、悲観的「アメリカ史観」においては「墮落」の局面が強調されることとなります。

トウェインの揺れ動く「アメリカ史観」は、プロットの展開に現れるこれらの局面への比重の置き方の違いに現れることが多くみられます。まず、君主制度下の英国において、啓蒙主義的民主政治が行われる可能性を謳い上げ、民主主義の王制に対する勝利を高らかに宣言する『王子と乞食』を見てみましょう。これはまさにアメリカの共和国の理念が中世以降の絶対王権政治に対して勝利を修める可能性を希望的に描き出したものとして解釈することができます。作品では主要人物に対しメロドラマの危機が何度も訪れるものの、王子エドワードが庶民の生活を経験し、草の根の民衆の声に耳を傾けることを学ぶ物語において、トウェインはほぼ一貫して「約束」の局面を全面に出して作品を構築しています。ところがほぼ同時期に執筆され、アメリカでは1885年に出版された『ハックルベリー・フィンの冒険』(以下『ハック』)(*Adventures of Huckleberry Finn*)ではこの希望的「アメリカ史観」が危機に立たされています。ここでトウェインは、アメリカにおける草の根民主主義とジェファソンのアルカディアの存亡の危機を訴えます。この作品では、「アメ

リカのエレミアの嘆き」のレトリックの可能性は極限まで追い詰められながらも絶妙に保たれています。この作品では、作者がアメリカの来たるべき未来に対して楽観と悲観の振り子の上でかろうじて楽観の方向にしがみついているさまが認められます。

次に発表された長編『アーサー王宮廷のヤンキー』(A Connecticut Yankee in King Arthur's Court, 1889)では、田園にかわって「アメリカの夢」の成就を約束してくれるいま一つのフロンティアとしての都市文明の持つ可能性を取り上げます。トウェインは、最後まで都市フロンティアが「アメリカの夢」を実現させると見せながら、結末で文明のもたらす機械類の破壊的特質を表面に浮上させ、彼の「アメリカ史観」ではすでにペシミズムがオプティミズムに取って代わっていることをあらわにします。この作品では、冒頭から結末近くにいたるまで工業国としてのアメリカに「アメリカの夢」が「約束」されているように見せながら、結末では、機械類による大量殺戮を描くことで、「墮落」の局面を持ち込んでいます。ここではもう「アメリカのエレミアの嘆き」のレトリックは完結されていません。

ただ、ほとんど結末に至るまで一九世紀のアメリカ文明が中世英国の封建社会を解放する希望を描き続けている点において、トウェインがいまだにアメリカの夢の完成にかすかな夢を捨て切れずにいたことがうかがえられるのみなのです。

次作の『間抜けのウィルソン』(Pudd'nhead Wilson)は5年後である1894年に発表されています。ここではもはやトウェインはアメリカの夢の成就への希望を一切捨ててしまっているように思われます。舞台を『トム・ソーヤーの冒険』(The Adventures of Tom Sawyer, 1876)や『ハック』同様、彼の故郷であるミズーリ州ハニバルをモデルとすることから、一層彼の「アメリカ史観」の変化があらわになるという興味深い手法も取りながら、作品では、トウェインは初めて奴隷制に関して深く追求を試みます。あらずじ上、「アメリカのエレミアの嘆き」の局面は「墮落」から一步も前進しません。ここにおいてトウェインは、1880年代を中心に大きな揺れを見せた、「アメリカの夢」への楽観と悲観の遍歴の旅をついに終えたと考えられるのです。

(前同志社大学嘱託講師)

Essay

マリオ・バルガス＝リョサに見られる メタフィクション性

立林 良一

1936年にペルーで生まれたマリオ・バルガス＝リョサは、1960年代に起きた世界的なラテンアメリカ文学ブームの中核に位置づけられる作家の1人で、現在も現役の作家として旺盛な執筆・言論活動を行っています(2006年に発表された最新長篇小説『パッドガールのいたずら』を取り上げた書評を『アメリカス研究』第11号に掲載していただきましたので、ご覧ください)。主要な作品の大半が邦訳されているので、日本にも愛読者は少なくありませんが、彼の名前がより広く日本で喧伝されたのは1990年の大統領選挙においてでした。ペルーを財政破綻に追い込んだアラン＝ガルシア大統領を厳しく批判する中で、自ら次期大統領選に出馬することを決意し、圧倒的な支持を集めていたバルガス＝リョサでしたが、選挙戦の最終盤になって、政治的にはほとんど無名だったアルベルト・フジモリ候補に猛追され、結局決戦投票において逆転で敗北を

喫してしまいました。日系の大統領が誕生したことで、ペルーという国が一躍日本で身近な存在となったわけですが、そのフジモリに破れた本命候補ということで、バルガス＝リョサの名前が繰り返しマスメディアに登場することになったわけです。

彼は1963年に、初めての長篇小説『都会と犬ども』がスペインの有力な文学賞を受賞したことによって本格的な作家活動に入り、66年の『緑の家』、69年の『ラ・カテドラルでの対話』と、読者の期待を裏切らない大作を次々に発表することで、その地位を確固たるものにしていきます。しかし70年代に入ると、それまでとは全く作風の異なる『パンタレオン大尉と女たち』(73)、『フリアとシナリオライター』(77)という作品を書くことで、大きな方向転換を印象づけました。彼の邦訳作品には、出版から時間が経ち、入手困難になっているものも少なくないのですが、『フリアとシナリオライター』は2004年ようやく邦訳が実現したため、現在日本でもっとも手に入りやすい状況にあります。そこで今回は、古くて新しいこの作品のメタフィクション

性という特質に注目しながら、70年代における作風転換の要因を考えてみたいと思います。

1948年から8年間続いたオドリア独裁政権時代に思春期を送ったバルガス＝リョサは、恵まれた社会階層に属しながらも、貧富の格差といった社会的不平等に強い問題意識を持ち、サン・マルコス大学入学後は積極的に反政府活動に参加していきます。当然のことながら1959年のキューバ革命は彼に非常に強いインパクトを与え、祖国ペルーにも同様な革命をもたらすべく、作家の立場からカストロ政権支持の発言を繰り返します。60年代前半サルトルのお膝元であるパリで暮らしていた彼は、まさに「アンガージュマン」の作家でした。とはいえ、彼の初期の長篇小説が世界的に高く評価されたのは、力業ともいえる驚くべき物語構成と、単なる政治的プロパガンダに墮すことのない豊かな内容を兼ね備えていたからこそでした。確かに『都会と犬ども』や『ラ・カテドラルでの対話』では軍部や独裁政治に対する批判が大きなテーマとなっていますが、従来の類似の小説にはない広がりや備えていたからこそ、ペルー、あるいはラテンアメリカという枠を越えて多くの読者を獲得することが可能になったのです。

キューバ革命直後は、民衆が武器を手に立ち上がり、力によって一気に社会変革を目指すという方向に何の疑いも抱いていなかったものの、カストロ政権が安定に向かう1960年代末から70年代初頭にかけて、彼のカストロに対する評価は大きく変化していきます。社会的平等が実現したことは間違いのないものの、それと引き換えに自由、とりわけ言論・表現の自由が失われつつあるキューバの現実を目の当たりにし、絶対的な価値観に縛られ、批判を一切許さない社会の息苦しさに疑問を感じ始めます。そしてそれは71年に、多くの文学者が反革命的であることを理由に自己批判を強要された、いわゆる「パディージャ事件」が起きたときに確信へと変わります。これ以降彼は、ひとつの価値観を絶対視するユートピア思想をきっぱりと否定し、たとえいくら時間がかかろうとも、民主主義によるゆっくりとした変革の道を目指すべきだと主張していくこととなります。

こうした政治姿勢の大きな転換は、60年代から70年代にかけての作風の転換にも密接に結びついていると考えられます。73年の『パンタレオン大

尉と女たち』は、軍部の批判を主題にしているという点で『都会と犬ども』と共通していますが、筒井康隆を連想させるスラップスティックともいべき物語の展開は、両者が同じ作者によるものとはにはわかには信じられないほど、異なる印象を読者に与えます。作品の中に笑いを全面的に取り込んだ背景に、硬直した価値観に縛られていた60年代の自分自身に対する反省の思いがあることは間違いありません。多様な価値観を容認する精神の余裕があって初めて、ユーモアが生まれると考えられるからです。

77年の『フリアとシナリオライター』は、作者とほぼ等身大の人物を主人公とする自伝的色彩の強い小説です。バルガス＝リョサは学生時代に10歳も年上の義理の叔母と、両親や親戚一同の猛反対を押し切って結婚したのですが、その一連の騒動が物語の縦軸となっています。その結婚が結局破局を迎えるに至る10年間は、彼が作家として世に認められるまでの無我夢中の時代だったわけですが、結婚を含む自分の生き方に迷いを持たなかった若かりし頃の自分を、40歳になって、ようやくある程度突き放して振り返ってみるだけの精神的余裕が生まれたからこそ、こうした作品が可能になったと考えられます。

この作品の面白さは、奇数章で語られる自伝的物語に、偶数章で語られる9つの、それぞれ独立した物語が横軸として絡んでくる点です。これはポリピア出身のシナリオライター、ペドロ・カマーチョが書いた連続ラジオドラマの台本という設定で、その内容はいずれも、一般大衆の人気娯楽番組の見本のような通俗的なものです。作家志望の作中の主人公は、いくつものラジオドラマを同時並行で、下書きもせずに量産し続けるカマーチョの超人的創造力に身近で接し、その作品はともかく、物書きとしての仕事ぶりに少なからぬ刺激を受けます。小説の登場人物として作家が登場し、その作家が書いた物語がストーリーの一部として作中に取り込まれているという点、またその作家が別の登場人物と創作の方法を巡ってやりとりを交わすという点において、『フリアとシナリオライター』はメタフィクションとしての性格を有しているといえます。原作でカマーチョに対して「物書き(escribidor)」という語が当てられていることは示唆的で、そこには作家(escriptor)としての地位を確立した40歳のバルガ

ス＝リヨサの自負のようなものが感じられます。60年代に書かれた長篇小説は、その重厚長大さゆえに、一定の知的水準を有する限られた読者にしか、その面白さが理解されなかったのに対し、70年代の2作品は、その読みやすさゆえに、はるかに多くの読者を獲得しました。こうした思い切った作風の変化は、大衆小説的な軽みと高度な文学性が両立しようと確信するに至ったバルガス＝リヨサの、作家としての円熟の表れということができます。小説の創造という行為そのものに対する問題意識の深まり

と、そこからもたらされた作風の広がりもまた、ひとつの価値観に縛られないという精神的余裕に導かれたひとつの帰結であったのです。

70年代の2作品は共に映画化されていて、『囚われの女たち』、『ラジオタウンで恋をして』というタイトルでDVD、あるいはビデオが入手可能です。特に後者は、キアヌ・リーブスとピーター・フォークという異色のキャスティングが見所だということ、最後に余談としてつけ加えておきます。

(同志社大学言語文化教育研究センター准教授)

Synopsis

「酒本真理子賞」受賞3論文要約(12面の記事参照)

「現代カナダ英語の曖昧性 アメリカ英語とイギリス英語との各言語的特質の比較分析において」

【英語論文】

英米語コース 石倉勤

“What is Canadian English, eh?” この疑問への探求が本論の目的である。現代カナダ英語には他種の英語が持っていない最もユニーク、かつ、重要な言語的特徴がある。それは「曖昧性」である。その「曖昧性」とは簡潔に表すと、カナダ英語の特色はアメリカ英語とイギリス英語の言語的特色を妥協的、折衷的に織り交ぜた混合物である、という意味である。本論では、カナダ英語の歴史的背景、つまり、過去2世紀に渡って起こった移民波の影響を垣間見た後、主に現代カナダ英語の言語的「曖昧性」を考察していく。

まずは、その「曖昧性」を、カナダ英語、アメリカ英語、イギリス英語の各言語ドメイン(形態論、語彙、音韻論、統語論)の比較対照によって説明していく。この各言語ドメインにおける比較対象の結果、綴りや発音を筆頭に、カナダ英語はアメリカ英語とイギリス英語の特徴を妥協的、折衷的に織り交ぜた、中間色を持つ曖昧な言語的特徴を持つ事が明らかになった。

加えて、現代カナダ英語の曖昧性を、英米加の6大新聞を実際に比較分析していった。調査対象となった新聞は、『ニューヨーク・タイムズ』(米)、『ガーディアン』(英)、『ナショナル・ポスト』(加)などの計120記事(各20記事)である。その比較調査では、文章の長さの比較、受動態の発生率を調

査した。そこから、カナダ英語で書かれた新聞の文章(1センテンス)は他の新聞と比べ、平均的な長さであると判明した。また受動態においても、カナダ英語の1センテンス、そして1記事あたりの受動態の発生率が、他の英語の新聞と比べ平均的な数字を出した。また、その受動態の発生率はイギリス英語の新聞と非常に近い数字を出した。上の2つの調査において、カナダ新聞、またはカナダ英語は顕著な中間色、つまり曖昧性を見せつけた。さらに、顕著な文法・語彙的な差異が全く見られない各英語で書かれた同じニュースのヘッドラインで、カナダ人はカナダ英語母語話者の書いた英語を選べるか、という調査をした。つまり、語彙や文法以外に、文章にカナダ英語的要素が存在するのか、そしてそこに曖昧性は存在するのか、を観察することが目的である。実際に行った調査において、カナダ人30人の回答者の60%が、3国の英語で書かれた文法・語彙に全く違いを見せていない、同じニュースのヘッドラインから、カナダ英語のヘッドラインを選び当てた。またそのヘッドラインを選んだ理由を聞くと、主に2種類の回答を得た。1つは「カナダ英語らしい構造である」、「文章の流れが、自分自身が書くような文章だ」という言語的な側面を見た回答と、「重要なのはこの情報である」、「その情報が英文の最初に来ている」などという、ニュース情報のFocus(焦点)への回答であった。ここから導き出せる結論は、カナダ人はそのヘッドラインから、彼らがカナダ人として精通している、英文の流れ、言い換えれば「曖昧性」を直感的に感じ取ったとい

うこと、そして、カナダ人として社会化され持ち備えている、ニュースへの同一の焦点が存在するのではないだろうか、ということである。しかしながら、回答者はカナダ人30人だけであり、統計的な

数字を考慮すると、この結論はまだ暫定的であると言える。深層の解明は今後の調査の課題としたい。このように、現代カナダ英語の特徴は、その曖昧性にあるのではないだろうか。

「明日のアメリカヒスパニック社会の動向 Spanglishのアメリカ社会における現代的位相観察 を通して」

イスパニア語コース 酢藤理代

今回の私の卒業論文は、スペイン語と英語の混成現象を取り上げることにしました。混成現象も幅広く、どのようにテーマを絞るかということや、資料収集・スペイン語翻訳と、多くの力を注ぎ真剣に取り組んだ上から、4年間の集大成となる作品を作ることができ、達成感に満ち溢れています。

論文を作成する際に、最も私に興味を抱かせたのが、何故混成語になるまでしてスペイン語が英語圏で存在しているかということでした。

この事柄は、おそらくとても奥深く、個々に異なるヒスパニックの生き方・考え方の全てを理解できなくとも、歴史や文化など多くの視点から、混成現象を捉えなければなりません。

しかし、言語と文化は相対する関係であり、言語を調べれば、文化を理解することができたり、文化を調べれば言語につながる事柄を理解することができたりなど、混成現象を調べることはとても興味深いものでした。

何よりも、当たり前ではありましたが、同じ理由で英語圏で生活しているわけではないため、ヒスパニック同士であっても全く異なる考え方を持っているということが感じ取れました。例えば、混成語を同じように使用していても、米国人でありたい

め、どちらの言語も中途半端にしか使用できないため、米国に住んでいるが、ヒスパニックであるということに自尊心を持っているためなど、決して一概には言える事柄ではありませんが、混成語を使用するという事は、多くの異なる人々の感情が交錯しているということです。

現在、アメリカ合衆国においては Spanglish (Espanglish) を使用したメディアがとても普及し、アメリカ社会のヒスパニックに対する対応は変わりつつあることも感じ取れます。

私にとって、とても難しい題材ではありましたが、ヒスパニックの移民が始まった頃から、今日に至るまでのラテンアメリカとアメリカの関係を知る上で、最も適した事柄であり、今後も更に深く研究していきたいと思っております。

入学当初にはなかった、物事を追求することへの楽しさをこの4年間で経験することができました。これからの私の人生からは、おそらくラテンアメリカに対する興味は消えることはないと思います。それどころか、ますます増えていくことと思います。その都度、今後もラテンアメリカと関わりながら、関わりあえるような人生を通り、多くの異なる事柄を楽しみながら追求していきたいと思えます。天理大学では、学ぶということの重要性、探求・追求することの楽しさ、責任感を持つことの大切さなど、多くの人生の基本となる物事の考え方を得ることができたことに心から感謝しております。

「ブラジルのファッションから見る人体美とセクシュアリティ」

ブラジルポルトガル語コース 西川光代

近年、ブラジル女性は、トップモデルとしてめざましい活躍を見せている。私は、その土台となっている現在のブラジルにおける美(人体美)意識が、ブラジルで流行しているファッションにどのように表れているかということに興味を持った。熱帯、亜熱帯性の気候の下、身体のラインがどうしても見え

てしまうブラジルでは、一般的に身体のラインや外見への関心が強い。ブラジルが世界第2位の美容整形大国であることから、ブラジルの人々が美の追求にとっても熱心であることがうかがえる。そこにはいったいどういった美の基準があるのだろうか。ブラジルでは、今、伝統的な国民の好みと、国際的な美の基準とのあいだで複数の美が存在しているといわれている。そのことはファッションの面でも顕著にあらわれている。ブラジル人女性に好まれる

ファッションは非常にセクシーで、身体のラインを強調したものが多く、そこには世界的な流行の波を受けつつも、ブラジル独特のセクシュアリティの表現、美の基準が見られる。

私は、この論文で、ファッションを通じてブラジル人女性のセクシュアリティの表現や美の基準がどういったものであるのかを明らかにしようとした。そのために、まず、ファッションとは何であり何を表現しているのかを概観し、次に、ブラジルのファッション誌から実際のファッションを例示した。最後に、ファッションからブラジル人女性の人体美とセクシュアリティについて考察した。

ファッションを通してみると、ブラジル人の美意識はたいへん高いということがわかった。特に、ブラジル人女性の美に不可欠なのは、顔よりも魅力的な身体にある。ブラジル人（男性も女性も）にとっての魅力的な身体とは、健康的なブロンズの肌、風になびくロングヘアー、胸、大きく盛り上がったお尻である。ブラジルでは国際的な美の基準の影響を受けながらも、国民の理想の美が根づいている。モデルたちはみな、細身で重心が高いが、肌をブロンズに焼き、美しいロングヘアーを維持し、胸を露出し、身体のラインを強調している。そこにブラジル人の美意識が表れている。

Recent Acquisition

アメリカス世界の日系移民研究資料

山倉 明弘

この度、文部科学省の2006年度（平成18年度）私立大学等研究設備費等補助金（文部科学省のいわゆる3分の2助成）に申請を行い（共同申請者：山倉明弘、矢持善和、野口茂）、アメリカス世界（南北アメリカ）の日系移民研究資料を入手しましたのでご紹介いたします。

資料は4部に分かれていて、（1）昭和前期刊行図書デジタル版集成「人口・移植民」の部、CD-ROM版全15枚、（2）『初期在北米日本人の記録』第1期全34巻、（3）日系移民資料集第2期南米編：明治・大正期～昭和戦前期全31巻のうちの第21巻～第30巻、（4）米国・カナダ未刊行学位論文「アメリカス（南北アメリカ）日系移民関係学位論文」全113点です。

（1）の昭和前期刊行図書デジタル版集成は『国立国会図書館所蔵目録（昭和元年～24年3月）』中の「社会科学編」に基づいて刊行されたもので、団体著作物・個人著作物約38,000件、50,000冊からなります。この国会図書館所蔵コレクションは、全体の約3割が発禁図書・パンフレット類で、今回初めて一般に公開される資料であり、昭和期の解明に欠かせない貴重な基本文献です。私たちはこの中から「人口・移植民」249タイトルを入手しました。これらの文献・資料の中には、拓務省拓務局、外務省通商局、外務省調査部、日本移民協会及び在外日本人

会等、日本からの移民に深く関わった組織がまとめた資料が多数含まれています。また、北米、南米の日本人移民社会を研究した個人による著作で入手・閲覧の極めて困難な著作も数多く含まれており、これらを詳細に検討すると、これまでに得られなかった視点や知見が得られるはずですが。

（2）の『初期在北米日本人の記録』第1期、及び（3）の「日系移民資料集第2期南米編：明治・大正期～昭和戦前期」は、全国の図書館に散在する北米・南米の移民に関する貴重な文献・資料を収録しています。ほとんどが北米・南米在住の個人または生活体験者の手によって書かれたもので、日本の近現代史に移民史を位置づける為の基本図書です。（1）の昭和前期刊行図書デジタル版集成とあわせると、その価値は一層高くなります。

（4）の「アメリカス（南北アメリカ）日系移民関係学位論文」は、アメリカス地域（主としてアメリカ、ブラジル、ペルー）の日系移民体験に関して比較的最近の過去30年、特に1990年代以降のアメリカ・カナダの大学に提出された学位論文です。アメリカス日系移民研究の最新動向や到達水準を計り、また最新の成果・知見を得ることが重要と考えたからです。本学会会員諸氏にもこれら研究資料をご活用頂き、アメリカス世界の多角的研究にご協力頂けると幸いです。

新カリ最初の卒業生3名に 「酒本真理子賞」を授与

天理大学アメリカス学会では、毎年卒業式当日に国際文化学部の旧英米、イスパニア、ブラジルの各学科の最優秀卒業論文執筆者に対して「酒本真理子賞」を授与してきた。しかし、昨年度の場合は、2003年度に国際文化学部が2学科体制で再編成され新カリキュラムがスタートして最初の卒業生を送りだしたことから、「酒本真理子賞」をヨーロッパアメリカ学科の英米語、イスパニア語、ブラジルポルトガル語の各コースにおいて選出された最優秀論文執筆者に授与された。授与式は、去る3月22日卒業式式典直後に開かれ、上記3コースの各コース教員・卒業生が参列したクラス会の席上、以下の受賞者3人にそれぞれ賞状と図書券2万円分の副賞が手渡された。

この「酒本真理子賞」は、1989年度に旧英米学科を卒業し、1年後に志し半ばにして白血病で亡くなった酒本真理子さんに因んで贈呈されるようになった。彼女の父親の酒本昌彦氏から、「後輩の育成とアメリカス学会の出版活動に役立ていただきたい」と毎年寄付を頂いているが、その一部を「酒本真理子賞」として活用している。

英米語コース：石倉 勤

“The Ambiguity of Modern Canadian English: Comparative Analyses of Each Linguistic Property with American and British English” [英語論文] (「現代カナダ英語の曖昧性 アメリカ英語とイギリス英語との各言語的特質の比較分析において」)

イスパニア語コース：酢藤理代

「明日のアメリカヒスパニック社会の動向 Spanglishのアメリカ社会における現代的位置観察を通して」

ブラジルポルトガル語コース：西川光代

「ブラジルのファッションから見る人体美とセクシュアリティ」

新入会員（敬称略）

小林千穂（4月） 井村俊義（4月）

編集後記

天理大学アメリカス学会では、昨年11月25日の年次大会席上開催された会員総会において、新井正一郎2代会長の後任として副会長の吉川敏博氏を3代会長に選出した。吉川新会長は、昨年夏から今年3月までの半年間のサバティカル中にアメリカの大学で在外研究に従事していたため、新井前会長が去る3月末まで吉川会長の代行を務めた。吉川会長は帰国後4月から新会長の任についた。来る11月に開催予定の第12回アメリカス学会年次大会で新企画のシンポジウムを予定している。

天理大学アメリカス学会の研究誌『アメリカス研究』第12号の発行は本年11月下旬を予定しております。同封の投稿規定の通り原稿を募集しています。原稿締切は8月31日です。奮ってご応募ください。

天理大学アメリカス学会の2007年会計年度は、昨年11月25日の年次大会開催日にスタートしました。2007年度の年会費（一般会員：5,000円、賛助会員：1口30,000円）を未納の会員の皆様は、至急、郵便振込取扱票にて指定口座（下記参照）宛にお振り込みくださいますよう、よろしくお願い致します。

口座番号：00900-5-70364

加入者名：天理大学アメリカス学会

天理大学アメリカス学会に関するお問い合わせは下記へお寄せください。

天理大学アメリカス学会ニューズレター

(No. 56：2007年5月10日発行)

編集者：吉川敏博

〒632 8510 天理市杣之内町 1050

天理大学アメリカス学会

電話：0743-63-9076

Fax：0743-62-1965

e-mail: tuaas@sta.tenri-u.ac.jp

http://www.tenri-u.ac.jp/tngai/americas/